

エドナ・アンドリュース著

『ロトマンの文化記号論入門 ——言語・文学・認知——』

谷口伊兵衛訳、而立書房、2005年

近藤 喜重郎

本書は、Edna AndrewsのConversations with Lotman: Cultural Semiotics in Language, Literature and Cognition (ロトマンとの対話：言語、文学、認知における文化記号論)の翻訳である。タルトゥ学派の創設者の一人であると共にその代表的指導者であるユーリー・ミハイロヴィチ・ロトマン (訳者はユーリー・ミハイロヴィッチ・ロトマンとしているが、本文では紹介者の習慣に従ってロトマンとした)の文化記号論を紹介したものである。タルトゥ学派は、現在の指導者の一人トロップによると、旧ソ連時代にロシアのモスクワとレニングラード (現サンクト・ペテルブルグ)の言語学と文学研究の伝統をエストニアのタルトゥで継承しているという。この学問的継承関係と、その主だった会議がモスクワとレニングラードで開かれたという事情から、欧米ではモスクワ・(レニングラード・)タルトゥ学派とも呼ばれている。著者のエドナ・アンドリュースは、T・ウィナーやI・ポルティス・ウィナーと並んでロトマンの文化記号論を欧米で紹介してきた記号論研究者の一人である。

本書の構成は以下のようになっている。

序説

第1部 ロトマンの文化記号論

第2部 言語テキストにおける記号空間の構築

第3部 認知科学としての記号論

この構成に見られるように、本書の目的は、ロトマンの文化記号論が (パースの理論と共に) 将来の認知科学との関係で発展性をもっていることを示すことにある。このことは、第一部の中で著者がロトマンのコミュニケーション・モデルをR・ヤコブソンやT・シービオクのそれと対比し、また合わせることによって、従来の記号論的モデルを認知学的なモデルに発展させようと試みていることから読み取れる。この試みはさらに認知科学の諸概念を説明しつつ記号論との接点を探る第三部に引き継がれている。トロップは、その論文「学派としてのタルトゥ学派」(1992)の中で、タルトゥ学派の記号論に関する考察が欧米の記号論との対比において行われることの必要性を説いているが、本書はまさにこの主題をより大きな展望のもとで取り上げたものである。

第二部は、ロシアの著名な文学作品を実際に分析することによって、ロトマンの文化記号論の二項的記号モデルを三項モデルに「 Casting straight」(84頁)できることを示すためである。著

者は、第一部で“西欧の”ロトマンと“ロシアの”ロトマンの相違を強調する。すなわち、西欧で紹介された“ロトマン”は、記号の二項対立の特徴を首尾一貫原理とした記号論を強調した。このことが、基本的に三項関係からなるパースの記号モデルに依存するアメリカの記号論研究者からロトマンが否定的に扱われた理由であるというのである。だが、実際の（すなわち“ロシアの”）ロトマンは、記号の二項対立の特徴を強調しながらも、これにのみ依存するタイプの記号論を提示したわけではない。

著者は、記号を二項関係でとらえるか、三項関係でとらえるかという問題にこだわっている。彼女は、どちらの観点が優位かという問題が「記号論の伝統において、もっとも論争的な問題の一つ」であると言う（23頁）。大雑把に言えば、記号論にはソシュールによって喚起されたヨーロッパ系のものとパースによって喚起されたアメリカ系のものがあるが、著者はパースの三項モデルを支持している。その一方で、著者は、「記号論の焦点は記号でなくて、むしろ、記号過程にある」と同時に、「記号どうしの中間面」にあるという点をも強調する（26頁）。そして、記号の非対称性、有標性、連続性といったものはこの観点から論じられることとなると言う。しかし、パースの三項モデルが記号の最小メカニズムといえるのかどうか、その中には三つの二項対立があるという解釈が可能であるという点をどう考えるのか、この点に著者は触れていない。個別的で他と全く無関係の記号というものは存在せず、紹介者はロトマンがこの点をそのテキスト論によって説明していると考えているのだが、著者はこの点を省いている。

第三部では、ロトマンの理論がかなり後景化されているが、それは、様々な認知科学の諸概念の紹介に紙数を割いているからである。ここでは、「起点記憶」（176頁）に触れておこう。法廷における証言に際して事実と合致しない情報が想起された情報として語られる場合があるが、この場合に認知と記憶が問題になる。記憶が獲得されるための諸条件と記憶自体が区別され、それらの関係が論じられるわけである。著者は、ロトマンの仕事が起点記憶の問題に「貴重な概念的深みを付加してくれる」（177頁）と述べるに留まっているが、ロトマンのモデルに従うと、次のように考えることができる。すなわち、記憶される情報の発信源はテキストであり、想起される情報もまたテキストとして組織化されて発信されるのである。想起された情報（＝記憶）として生成したテキストは、記憶の対象となったテキストと同じものではなく、相互にコード化された諸テキストから構成されたテキストとして、そして相互にコード化された諸テキストの関連の中で生成する。それゆえ、想起されたテキストを構成する諸テキストと関連付けられた諸テキストのうちから、その「起点」となるテキストと、最終的に想起されたとみなされる、構成されたテキスト全体とを区別する必要があるのである。以上の考察にロトマンが唱えた「記号圏」の概念が加わるとさらに議論が発展する。

もう一つ指摘すべき点がある。著者は、本書の全体を通じてロトマンの記号論が認知学との間に接点を持っていることを示そうと試みているが、ロトマンの記号論がそのほかの方面に対しても影響力を持っているという点を示しているかどうかは疑問なのである。もちろん、ロトマンの文化記号論を紹介すれば、それがさまざまな分野に影響を及ぼす可能性をもっていることが自然と示唆されるとは言えよう。例えば、ロトマンは、記号論の観点から文化と

エドナ・アンドリュース著

『ロトマンの文化記号論入門 ——言語・文学・認知——』

谷口伊兵衛訳、而立書房、2005年

は何か、歴史とは何かという点を掘り下げた。例えばまた、ロトマンの記号論は、文化の記号メカニズムという観点から倫理学とも関係をもっており、それは「記号倫理学」という分野の創設を促している。紹介者は、この点にこだわる必要があるように考えているが、著者はこの点にはこだわっていないように見える。

本書を紹介するにあたって最後に、タイトルが「文化記号論入門」となっているという点に触れておきたい。原題は上に紹介したとおり、**Conversations with Lotman: Cultural Semiotics in Language, Literature and Cognition**（ロトマンとの対話：言語、文学、認知における文化記号論）である。本書は、その序に書かれていることであるが、記号論研究者や認知学者を読者として想定したものである。つまり、これから記号論を学ぼうとする学生にとっての入門書ではなく、すでにある程度記号論や脳科学、認知科学の用語に接したことのある研究者・学生を対象としたロトマンの文化記号論の入門書である。